

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第706号 平成26年3月18日

さとり世代（2）

新人類ともいえる「さとり世代」出現の背景に関して、原田曜平氏は「さとり世代―盗んだ車で走りださない若者たち」という本の中で、「さとり世代」は「長引く不景気」と「ソーシャルメディア化」という日本社会の未曾有の変化に直面し、その変化に適応しようとして来たのであり、「さとることを、さとったような態度でいることを、社会に強制されて来た」のだと述べています（同氏著「さとり世代」から）。

また原田氏は、「さとり世代」は日本の「失われた20年」に人生の大半を過ごして来たため、彼等は消費には極めて慎重な体質になっていると指摘しています。コスパ（コストパフォーマンス）という言葉があるように、「さとり世代」は、「かつての若者のように消費意欲が旺盛で、新品にビビットに反応を示したり、見栄を張るために豪快な消費をしたりしない（同氏著「さとり世代」から）」という訳です。

また、原田氏は、「さとり世代」は、社会のソーシャルメディア化に伴い「ソーシャルメディア社会」という村の中で生きており、目立つことにより周りの村人から出る杭を打たれ、村八分になる事を極端に恐れているとの指摘は重要だと思います。ケータイを片時も手放さない若者達の姿を見ていると、「ソーシャルメディア村」から弾き出されないための自己防御なのかも知れませんが、「目立たず、しかし、繋がっている」という処世術には少し悲しい気もします。

また、原田氏は「さとり世代の若者達が、さとった風な態度を取る事によって、かつての若者達が良くも悪くも持つ事が出来ていた行動力や無駄という貴重なものを失ってしまっている（同氏著「さとり世代」から）」とも述べています。

私も最近の若い人達を見ていると、極力無駄な努力は避けようとしているように感じられます。失敗した時のダメージを恐れているのかも知れませんが、その気持ちは分からなくはありませんが、例え失敗しても、チャレンジした事で得られるものも沢山あります。「さとり世代」の皆さんには、その事にも気付いて欲しいと思っています。

ただ、「さとり世代」の特徴として示されている行動原理が、社会環境の大きな変化から身を守るための処世術として身に備わって来たものだとすれば、そうした社会を作った世代の人達には、「さとり世代」というレッテルを貼る前に、その責

任を自覚する必要があるのではないのでしょうか。

牛窪恵氏も、「さとり世代」を「日本の将来には期待しない」「どうせこんなもの」と悟りきったままにして置くのは、狂喜乱舞したバブルの時代に、しっかりと国のあるべき姿を考えなかった今の大人世代としては無責任と厳しく指摘しています（同氏著「さとり世代の消費とホンネ」から）。

だとすると、我々は、「さとり世代」の若者達に対して仕方がないと突き放すのではなく、もっと積極的に関わりながら、彼らが自立し得るようサポートして行く事も必要だと思います。

もっとも、今の大人世代だってかなり疲れていて「世の中こんなもの」というある種の諦め感も漂っており、こんな状態では「さとり世代」に対して夢を持ってとか、チャレンジ精神を持って等と試してみても、若者達の心に届く筈ありません。

牛窪恵氏は、「さとり世代の強い将来不安、そして消費や恋愛に慎重な姿勢は『2020年、東京五輪を間近に見る事』ぐらいでは解決できない。もっと根本的な社会保障や雇用の問題に解決策を提示できてこそ『明日はきっとよくなる』と希望を持ってもらえる。その為にも、我々大人はウソをついてはいけない。彼ら次世代に“ツケ”を残さないと誓った約束を、これから果たして行かねばならないのだ。」と述べています。その言葉の中には、彼女の怒りさえ感じられます。

「さとり世代」に対してガンバレという前に、さとり世代が将来に向かって頑張れる社会を作る事、これこそが今の大人世代の大きな責任だというのはその通りであり、私よりもはるかに若い女性から「大喝！」を入れられた思いです。

（塾頭：吉田 洋一）